

異常気象と言われながらも、秋から冬への季節の移り変わりを実感する今日このごろです。寒くなると新型コロナウイルスの感染拡大も心配ですね。前号の冒頭にもお伝えしたように、コロナ禍により図書委員会活動も思うようにできず、約半年遅れてのスタートとなりました。そんな状況で2回目の図書委員会で、「本を配達する」という企画が出され、すぐに満場一致でやることが決まりました。そしてどのような活動内容にするか、またどのようなネーミングにするか、が話し合われました。そしてその翌週から「図書館にこなくても読みたい本を借りたり、読んだ本を返したりできる」活動がスタートしたのです。名付けて「ウーバーブック」。今回の図書館だよりは、この「ウーバーブック活動のお知らせ」と、今年度から5年生の教科書にのっている「重松清さんの作品の魅力」をお届けします。

### ウーバーブック活動のお知らせ

まず、「ウーバーブック活動のめあて」をお伝えします。

- ① 全校の読書活動推進の役に立つ。
- ② 休み時間の図書館の「密防止」に役立つ。
- ③ 図書委員として責任ある行動を身につけることができる。 以上の3点です。



つぎに、みなさんが実際に行う場合の「ウーバーブックの手順」を紹介します。

校内の各学年の廊下にウーバーブックコーナーを設置しました。ここには「ウーバーブック注文書」と「注文ポスト」と「返却ボックス」が置いてあります。

- ① 「注文書」に日付、名前、クラスと借りたい本の名前を書く。(本の名前がわからなければ、楽しい絵本とか、感動する物語など、本の種類を書くだけでも良いです。)
- ② 注文書を「注文ポスト」に入れる。  
たったこれだけで、注文した本が数日のうちにみなさんの手元に届きます。(本が貸出中の場合は遅くなります。)中休みに当番の図書委員がポストに入っている注文書を回収し、その後学校司書が本を探して配達当日に貸出し手続きを行います。
- ③ 本と注文書を当番の図書委員がみなさんのクラスに届けるので、注文書の下の方に書かれている受け取り書に、受け取った日付、受け取った人の名前、クラスを書いて、本人か代理人(代わりの人)に〇をつけて配達した図書委員に注文書を渡します。これで貸出し手続きは終わりです。
- ④ みなさんが読み終わった本は、返却ボックスに入れておけば、図書委員が回収して返却手続きをします。(しかし現在はコロナの感染が拡大している状況なので、学校司書が回収しています。)

以上が図書委員会による「ウーバーブック」の活動内容です。

ちなみに、この活動の最初の1週間の注文件数は18件でした。みなさんのご利用をお待ちしています。

### 重松清さんの作品の魅力

昨年までは重松さんの作品、「カレーライス」が6年生の教科書で扱われていましたが、今年度からの5年生の教科書には、「本は友達、作家で広げるわたしたちの読書」の単元で「カレーライス」の他にも、大きく重松さんの作品が紹介されています。そこで今年度の図書購入では教科書で紹介された7作品のうち5作品(2作品は品切れで入手不可でした。)を購入しました。以前から「くちぶえ番長」や「きみの友だち」は所蔵していましたが、宮沢賢治や椋鳩十と比べると蔵書数は、さみしい限りでした。

さて、入荷した本を読んでみると、「うーん、なるほど。」と唸ってしまいました。主人公や登場人物が小学校高学年にしぼられているので、共感性が半端ないのです。ショートストーリーがほとんどで、一つの物語を読むのに約15分ほどしかかからないのですが、その短い中に作者の想いがギュッと凝縮されています。そしてそれを一番よく表しているのが登場人物たち。それぞれのキャラクターが実に生き生きと描かれています。体形や髪形や服装が細かく描写されているわけではないのですが、〇〇さんとか、□□くんなど文中に名前が出てくるだけで読者の頭の中にすぐイメージが浮かんでいきます。とくに主人公の描写では、読者の心の中に何かが入り込んで、いままで忘れていた場所をキュッとやさしくつかまれるような感覚がおきます。そして主人公がどんな表情でどんな気持ちでいるのか手に取るようによくわかる、いや、わかるというより自分が登場人物になったような錯覚に陥るのです。そういった人物描写だけでもかなりやられてしまうのですが、それだけではありません。「作者の伝えたいこと」にたどりつくまでの伏線がまるで推理小説のようにいくつも用意されているのですが、それらは読者を迷わせるためのものではなく、「作者の伝えたいこと」にたどりつく道しるべとなり、やがて集結されて読者を納得させます。そして読後には鼻の奥にツーンとした甘酸っぱい香りと言葉にならないため息をつかせるのです。

ここでは今年購入した中から次の3冊を紹介します。ぜひご一読いただけると幸いです。

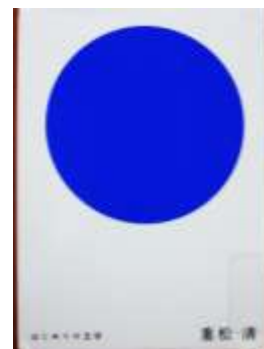
①「小学五年生」 2007年3月 文藝春秋 発行

本の名前がそのものずばり。文中には明記されていなくても、小学5年生にまつわる短編17話がかかっています。4年生の終業式で撮った写真を大切に、この春転校していく男の子の話「葉桜」や、ものがゆがんで見えてしまう目の病気を患い、手術を間近にひかえるおとうとがいる男の子の話「おとうと」や、夏休みに開かれた『子ども天文教室』の5年生クラスで、知らない学校の女の子の隣の席に座った男の子の話「プラネタリウム」など、もうキュンキュンが止まりません。



②「はじめての文学」 2007年7月 文藝春秋 発行

だいそれた本の名前ですが、これは重松さんがつけたのではなく、発行社が子どもたち向けに発行した、全12巻からなる「はじめての文学シリーズ」の一つです。著名な作家12人が一人一冊ずつ発巻しており、その名前を見ただけでも重松さんが売れっ子作家仲間入りを果たしていることがよくわかります。村上春樹、村上龍、よしもとばなな、宮部みゆき、浅田次郎、川上弘美、等々。この本には教科書に掲載されている「カレーライス」を含む短編8作品が収められています。



③「おじいちゃんの大切な一日」 2011年5月 幻冬舎 発行

この本は絵本の装丁をしている単独の短編小説です。主人公は5年生の女の子エリカ。ある日お父さんと工場のロボットの話をしていたら、もともとあさっては家族でおじいちゃんの家に行くことになっているのに、その前日に一足早く一人で先におじいちゃんの家泊まりに行くことになりました。泊まった翌日、朝早く起こされたエリカちゃんは、おじいちゃんが勤める工場におじいちゃんと一緒に連れていかれます。そこでエリカちゃんが目にしたのは・・・。



私の体験に近いストーリーなので、お話だけでもグッときているのに、はまのゆかさんの温かい絵がマッチしていて、トドメをさされます。今年購入した物語の本の中で、私にとっては間違いなくベスト3に入ります。

ではまた、次号でお目に掛かりましょう。お楽しみに。